

男女共同参画社会へ向けての啓発誌

しまねの  
**女と男**  
ひとひと



特集

# 男女共同参画社会と大学生の意識

～「大学生向けライフデザインに関するアンケート」より～

- 「大学生向けライフデザインに関するアンケート」結果の概要 … 2
- 大学生アンケート調査について～「ゆるやかな役割分担」を愛好する世代～  
島根大学法文学部准教授 片岡 佳美 …… 4
- リレーコラム …… 6
- データで見る男女共同参画 …… 6
- 講座レポート …… 7
- 活動報告 …… 8



あすてらす

# 男女共同参画社会と大学生の意識

## ～「大学生向けライフデザインに関するアンケート」結果の概要～

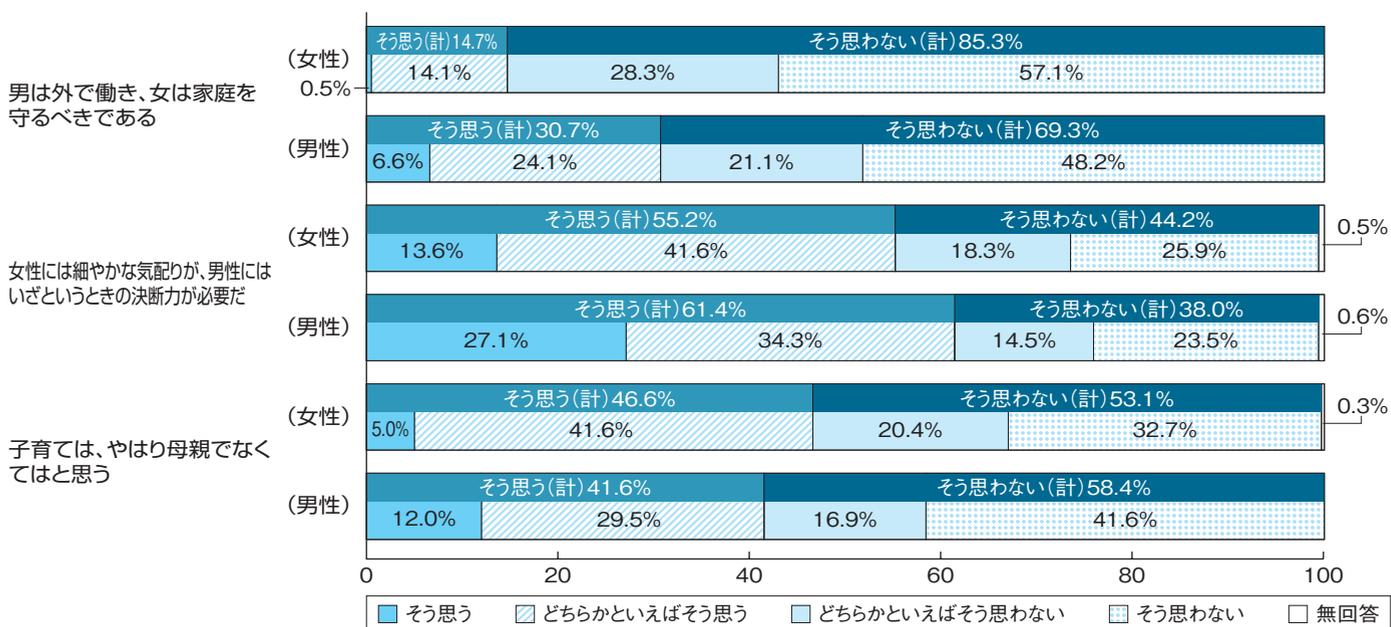
島根県では、若い世代に向けた男女共同参画推進の取組として、現在、大学生を対象にライフデザイン支援事業を展開しています。最近の各種調査によれば、若者世代の性別役割の肯定や20代以下の女性の専業主婦志向などが指摘されていて、若者世代が男女共同参画の意義を理解し、そうした視点を持って人生設計する力をつけることが、男女共同参画社会実現のために欠かせないとの思いからです。

では、実際に島根県に住む大学生たちは、性別役割や結婚・出産、仕事と家庭のバランス等について、どのように考えているのでしょうか。今年5～6月に県立大学1年生を対象に実施したアンケート結果から、その傾向を見てみましょう。

### ●男女の役割等に関する意識

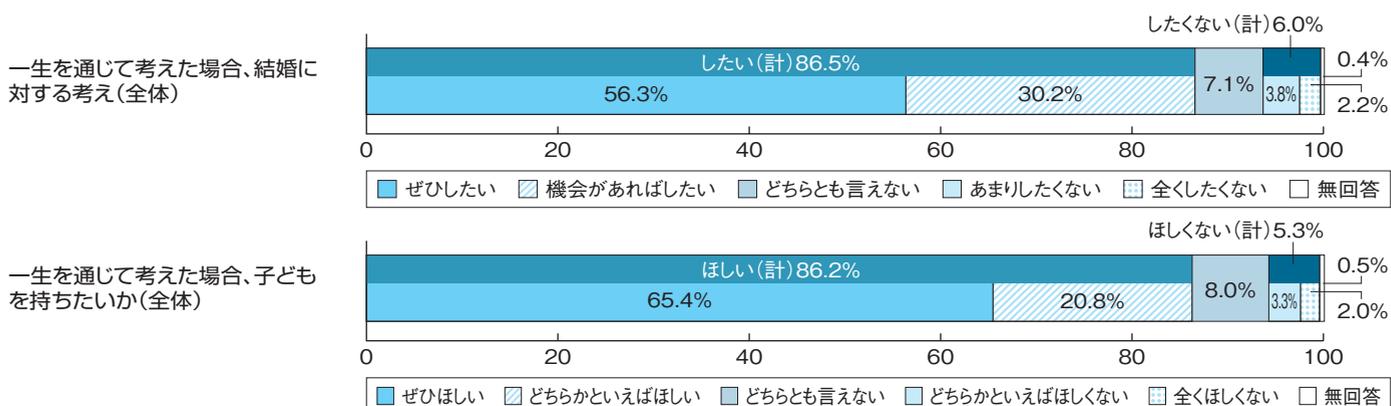
典型的な性別役割分担意識を示す「男は仕事、女は家庭」については女性の8割以上、男性の約7割が否定的で、この割合は、島根県で平成21年に実施した「男女共同参画に関する県民の意識・実態調査」（女性64.0%、男性56.7%）より、また内閣府が平成24年に実施した「男女共同参画社会に関する世論調査」（以下「H24国調査」、女性48.8%、男性41.0%）より、いずれも高くなっています。

一方、「女性は気配り、男性は決断力」には、女性の半数以上、男性の6割が肯定的で、「子育ては母親」には男女とも4割以上が肯定的な意識を持っていて、役割の内容によって異なる結果となっています。



### ●結婚、子どもについての希望

将来の結婚については9割近くがしたいと考え、同じく、子どもも9割近くがほしいと考えています。



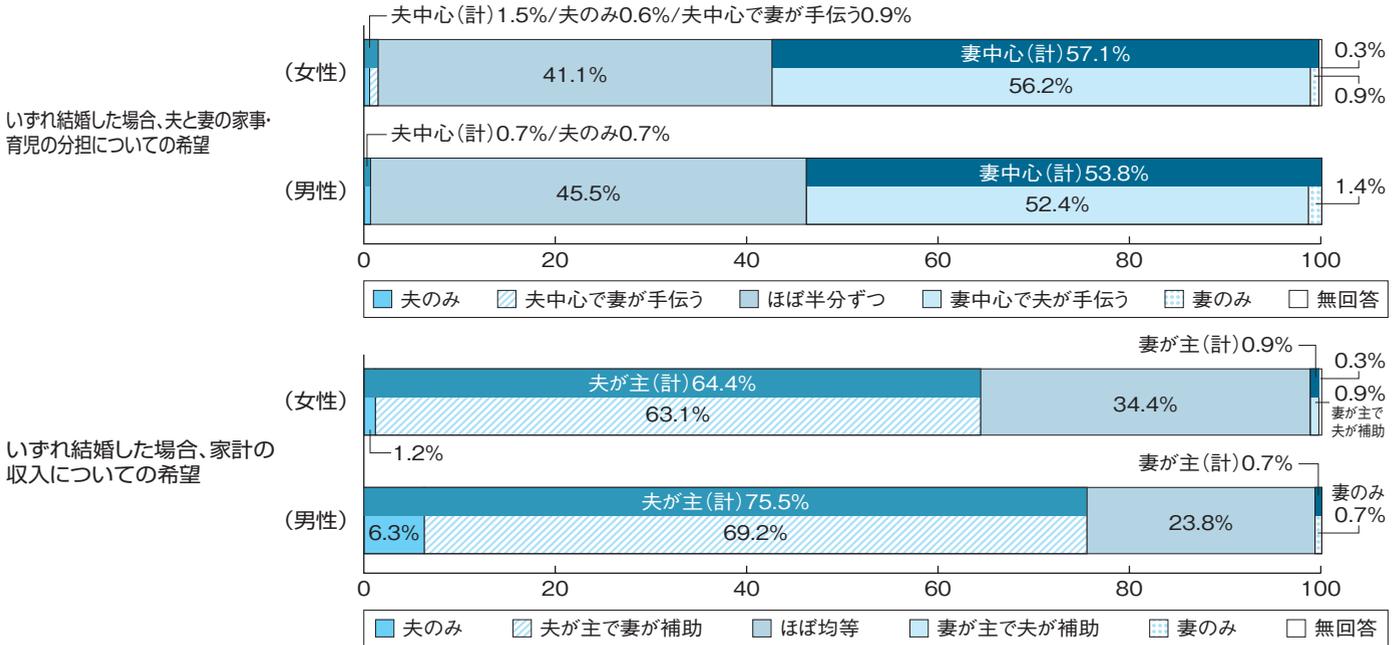
**【大学生向けライフデザインに関するアンケート調査】**〔調査主体：(公財)しまね女性センター〕

- 調査の対象 島根県立大学（浜田・出雲・松江の全キャンパス）1年次に在籍する学生
- 有効回収数 549人（女性382人、男性166人、不明1人）

**●結婚後の家庭内での役割についての希望**

将来結婚したいと回答した人(女性331人、男性143人)を対象に、結婚後の家庭内の役割について希望を尋ねると、家事・育児については、男女とも「妻中心」が半数以上ですが、夫と妻で「ほぼ半分ずつ」を希望する割合も40%台となっています。

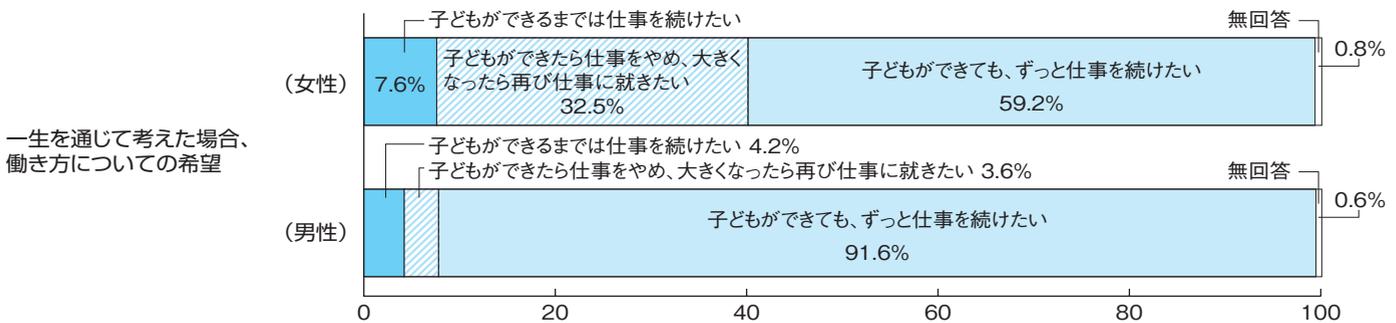
一方、家計の収入については、女性の6割以上、男性の7割以上が「夫が主」を希望していて、「家事・育児従事者としての妻」よりも「稼ぎ手としての夫」への期待の方が高く、しかも、稼ぎ手の当事者となりうる男性の方が、その意識が高いと言えます。



**●働き方についての希望**

女性は、「子どもができて、ずっと仕事を続けたい(育児休業の取得を含む)」という「就労継続型」を希望する割合が6割近くで、「出産退職型」(子どもができるまでは仕事を続けたい)の希望者と「中断・再就労型」(子どもができたら仕事をやめ、大きくなったら再び仕事に就きたい)の希望者の合計(40.1%)を大きく上回っています。この結果を、H24国調査の「女性が職業を持つことについての考え方」の設問と対応させて見てみると、H24国調査には「不就労型」(女性は職業をもたない方がよい)や「結婚退職型」(結婚するまでは職業をもつ方がよい)の選択肢があるため単純比較はできないものの、女性の働き方について「就労継続型」をよしとする割合が47.5%となっており、H24国調査の結果よりも就労継続意欲が高いことがうかがえます。

一方、男性の場合は9割以上が「就労継続型」を希望しています。



■調査結果の詳細をお知りになりたい方は、下記宛にご連絡をお願いします。

公益財団法人しまね女性センター 〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ236-4  
tel : 0854-84-5514 fax : 0854-84-5589  
e-mail : asu-08@asuterasu-shimane.or.jp

# 大学生アンケート調査について

## ～「ゆるやかな役割分担」を選好する世代～

島根大学法文学部 准教授 片岡 佳美

「男はこうだ、女はこうだ」のように自分や他人の生き方を性別で決めつけることなく、十人いれば十通りの性があるとして、だれもが自分なりの性を生きることができる社会。それが、私たちが目指す男女共同参画社会である。その実現のためには、より多くの人びとが固定的な性別イメージから自由になる必要がある。

そうした立場からみて、少し気になることが報告されている。近年、性別に固有の役割・生き方があるとする意見について、若い世代の人たちが肯定的になってきているというのである。

内閣府の世論調査によれば、「男は外で働き、女は家庭を守るべきである」という考え方についての20代の回答では、「賛成」の割合と「どちらかといえば賛成」の割合の合計が2002年調査では38.9%、07年調査では41.3%、そして12年調査では50.0%、と上昇してきている。12年調査では、賛成派の割合は他の年齢層でも07年調査と比べて増大したのだが、20代は30・40・50代と違って、賛成派の割合が反対派の割合（「反対」と「どちらかといえば反対」を合計した割合）を上回る点が特徴的だ<sup>(注1)</sup>。

島根県が実施した「男女共同参画に関する県民の意識・実態調査」においても上記と同じ調査項目があるが、やはり20代で、賛成派の割合が2004年に14.6%だったのが09年には42.9%と増大している<sup>(注2)</sup>。

そのようななかでの島根県立大学の学生意識調査である。この調査でも、「男は外で働き、女は家庭を守るべきである」について賛否が尋ねられている。さて、結果はどうか。全体で見ると賛成派が14.7%、反対派が80.3%となっており、ここでは国や県の調査結果のように若い世代の「保守化」は見られない<sup>(注3)</sup>。

ところが、別の視点から性別役割意識を尋ねた項目（「女性には細やかな気配りが、男性にはいざというときの決断力が必要だ」「子育ては、やはり母親でなくてはと思う」）についての結果を見ると、固定的な性別役割に対する反対派が多数というわけでもない。男性においても女性においても、賛成・反対がほぼ半々という状況である。男女が仕事と家庭で棲み分ける必要はないとしつつも、男は行動力で、女はケアや情緒

面でリーダーシップを発揮する、という性別パーソナリティについては肯定する学生も少なくない。

さらに、結婚したときの夫・妻の家事・育児の分担のしかたについての希望を尋ねた結果では、「妻中心で夫が手伝う」が男女とも50%を超え、家計の収入は「夫が主で妻が補助」は女性64.4%、男性75.5%となっている。自分が希望する働き方については、「子どもができてみずっと仕事を続けたい」と答えた割合が、男性では91.6%だが、女性では59.2%と開きがある。はっきり役割を決めつけることまでは望まないにせよ、稼ぎ手の役割は基本的に夫のものであり、家事・育児の役割は基本的に妻のものだ、という考えが多くの若い男女に根付いている。

学生たちには、男女共同参画についてもっと教えなくてはならない—そう言いたくなる気持ちも分かるが、話はそんなに単純ではないかもしれない。今回の調査で大多数の学生たちが「男は外で働き、女は家庭を守るべきである」について反対意見を示していることから分かるように、かれらはこういう「きっぱりした棲み分け」はよくないと思っている。あるいは、少なくとも、よくないとされていることは知っている。そのような棲み分けが何の疑問も持たれずに受け入れられた40～50年前と違って、今の学生たちは、それを絶対と思わず評価し判断することができる立場にある。

しかしかれらの多くは、「これまでの役割分担を基本としたうえで、互いに相手方の役割を手伝う」ことを選好する。「きっぱりした棲み分け」を評価した結果それを否定するが、そのうえで「ゆるやかな役割分担」を選択するのである。「ゆるやかな役割分担」を認めると言っても、与えられた生き方を生きるのではなく自ら選択している、という点が重要だ。

だがそれにしても、なぜ「対等」よりも「分担」を選ぶのか。これについては、私自身が教員として学生たちの話を聞いたりするなかで思うことがある。

かれらは結局、不安やリスクを避けるために合理的なやり方として、「ゆるやかな役割分担」を選好しているのではないだろうか。何でも対等の男女共同参画型では、互いに話し合う機会も増すが、そのぶん葛藤・



片岡 佳美 (かたおか よしみ)

●プロフィール

(財)兵庫県長寿社会研究機構 (現：(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構)・家庭問題研究所主任研究員を経て、2001年4月～島根大学法文学部講師。2004年10月～現職。専門は家族社会学。

現代家族の様々な問題や課題を、現場の視点を大切にしつつ、社会状況との関連で考え、解決に向けて提言している。

対立も多くなる。たとえば、夫と妻両方が家事をすすんでやるようになれば、その領域で双方の利害関心が高まる。また、二人が職業に専念すれば、だれが家庭のことをするかをめぐって交渉しなければならなくなる。このように、何でも対等の関係は、安定した関係の維持という点でもリスクを負うものでもある。

無難を追求すれば、やはり役割を決めて分担し、競合しないようにするのがよい、となる。分担のしかたは、従来の性別役割に基づいたほうが葛藤は少ないだろう。また、役割分担を通じてできる相互依存関係は、関係破綻の可能性を減じる効果もありそうだ。ただし、融通の利かない役割分担では、個人の犠牲を強いることにもなり、かえって安定した関係の妨げになる。互いに相手方を手伝い合う気遣いも重要だ。そんなことを考えて、「きっぱりした棲み分け」と男女共同参画型の対等な関係との間に位置する「ゆるやかな役割分担」が望ましいとされるのかもしれない。

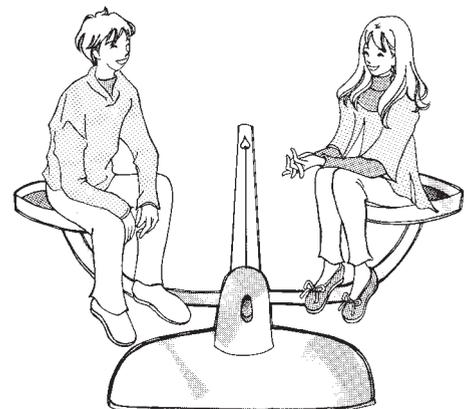
「リスク社会」「想定外」など、現代社会は先が見えないことが前提となっている。家族でさえもリスクを考えなければならない場である。今の学生たちは、そんな不安定な社会のなかで、自分の安心・安全を守る方法を探せというプレッシャーをひしひしと感じているのかもしれない。

ところで今回の調査では、男女それぞれ8割超が「結婚したい」「子どもがほしい」と答えていた。もはやだれもが当たり前前に結婚したり子どもを持ったりできないし、また、家族をつくったとしても家族はもはや自動的に安定が得られるものではなくなっている。それなのに、多くの人びとが家族を求める。リスクだらけの家族になっても、依然として人びとは、そこにやすらぎの場という夢を託す。その夢を実現するための策が「ゆるやかな役割分担」なのだろう。しかしそれは、男女共同参画社会の実現とは違う。

近頃、大学の授業などで男女共同参画の話をする時、少数ではあるが、学生たちの中から「そんな話は聞きたくない」という反応が返ってくることもある。かれらは「これ以上不安ばかり与えないで！」と言いたいのかもしれない。もっともな話だが、不安やリスクについては、回避するだけで解決するようなものではない。どうせならチャレンジすることも選んでみてはどうか。役割分担ではなく対等な個人の関係で、幸せや喜びを感じることができると一緒に挑戦してみよう。きっとやりがいもあるし、成功すれば生きがいも増す。男女共同参画について講義する際には、そういうことを伝えることも必要かもしれない。今回の調査の結果は、そんなことを考えさせるものであった。

[注]

- (1)この調査では「わからない」という回答選択肢もある。
- (2)この調査では、回答選択肢は「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4つ。
- (3)この調査では、回答選択肢は「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4つであるが、集計には「無回答」を含めている。



## ライフデザインの理想と現実 ～10年前の女子大学生編～

大学を卒業してはや10年余、自分が学生だった頃を思い出すと、私は専業主婦願望が強く、まだ見ぬ夫が稼ぎ手となることを前提に「将来結婚して子どもができれば仕事を辞める」と決めていました。きっと母親がそうして私を育ててくれたからだと思います。

ところが数年後、実際にその「将来」を迎えた時に当時会社員だった私の選択は、育児休業を取得して正社員として働き続けることでした。その理由は、いざ働き始めたら仕事にやりがいが出て長く働きたいと思うようになったことと、イクメンブームが始まった頃でもあり夫が協力してくれるだろうと思ったからです。そして何より、私も夫もまだ社会に出て数年。経済的に共働きでなければ、ゆとりある生活ができない現実がありました。仕事も子育ても頑張ろうと決めてキラキラ輝くワーキングマザーを夢見ながら、半年間の育休を経て希望を胸に職場復帰したものの、またも立ちはだかったのが現実の壁です。夫は仕事で帰りが遅くなりがち。子どもが熱を出すたび上司や同僚に謝りながら欠席、早退の繰り返し。残業はできないけど、仕事では結果を求められる。ワーキングマザーは想像以上に大変で、キラキラ輝くところが毎日くたびれていまし

た。その後第二子が生まれると、大変さも2倍になりました。このとき感じていた働きづらさが、私一人の問題ではなく社会全体が抱える問題だと気づいたのは、縁あって女性センターでの職を得てからのことです。「男は仕事、女は家庭」の性別役割分担解消のために、いかに法律や制度が整っても、まるで小さい子どもがいて働いているのが悪、と言わんばかりの空気が漂う職場では、あまり効果はありません。その空気に負けて退職せざるを得ない女性は、今も多くなります。

親の世代とは社会の状況が変わっていることを認識せず、時代錯誤な理想を抱いていた私は10年後、ワーク・ライフ・バランスを模索しながら働き続けています。あの頃よりさらに労働環境が厳しくなった昨今、これから社会に出る若者を含め、誰もが働きやすい社会づくりの一助となることが今の私の理想です。

公益財団法人しまね女性センター  
専門員 漆谷 佑美子



### データで見る男女共同参画④

この数字  
ご存じですか？

75.7%

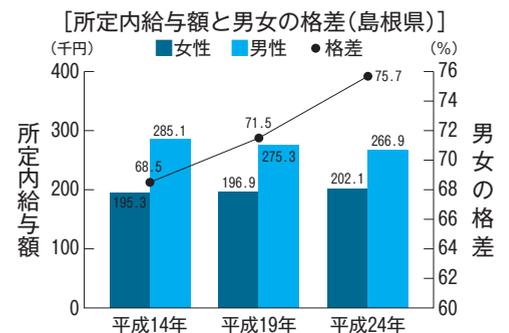
これは、平成24年賃金構造基本統計調査（厚生労働省）において示された、島根県における男性一般労働者の所定内給与額を100とした場合の、女性一般労働者の所定内給与額の割合です（注1）。しかも、これはあくまで一般労働者のみで比較した場合の数字ですから、女性の割合が圧倒的に多いパート等の短時間労働者などを含めた全ての労働者を男女で比較すると、賃金格差はもっと大きくなるでしょう。

この格差の原因としてよく指摘されるのが、女性の勤続年数の短さと管理職比率の低さです。実際、島根県の女性一般労働者の平均勤続年数は9.4年で、男性の12.8年より短く（平成24年賃金構造基本統計調査）、係長相当職以上への女性登用の割合も18.1%にしかならないのですが（平成23年度島根県労務管理実態調査）、これらのデータの背景には、「男は仕事、女は家庭」に代表される性別役割意識があると言えるでしょう。もちろん、今号の特集での大学生向けアンケート調査でも顕著だった、「夫と妻の家事・育児分担は妻中心で夫が手伝う」、「家計収入は夫が主で妻が補助」等の考え方も無関係ではありません。

ただし、この数字からは、格差解消の糸口も見えないわけではありません。まず、時系列的に比較してみると、10年前（平成14年）にはもっと大きかった格差が、縮小傾向にあります（注2）。また、今回の島根県の数値は全国平均（70.9%）よりも格差が少なく、都道府県別に比較しても、沖縄、鳥取、秋田、岩手県に続き格差の少ない方から5番目という結果です。この格差解消の流れをよりいっそう進め、労働現場における男女共同参画をしっかりと根付かせていくことが目指されています。

（注1） 所定内給与額とは、労働契約等によりきまって支給される現金給与額のうち、時間外勤務手当や深夜勤務手当、休日出勤手当等の超過労働給与額を差し引いた額をいう。

（注2） 毎年実施される賃金構造基本統計調査によると、H14年調査では68.5%だったが、H15年調査で71.5%になってからH22年まで71%台～72%台で推移し、H23年調査で76.2%となっている。



## 【男性のためのブラッシュアップセミナー(川本会場)】 「もっと輝く！ 自分流シニアライフ発見講座」(全3回)

日程：①7月18日(木)、②8月6日(火)、③8月29日(木) [主催：川本町、島根県、(公財)しまね女性センター]

男性のみなさんが、男女共同参画の意識を持って今後の人生を考えることで、生き活きとしたシニアライフを送ってほしいと企画したブラッシュアップセミナー。主に中高年世代の男性を対象に、3回連続講座として実施しました。

第1回は、映画「エンディングノート」を鑑賞した後、これからの人生について、男性同士ざくばらんに語り合う方式でスタート。映画の主人公のようにはまだ準備ができていないけれど…と大いに刺激を受けられた参加者たちにとって、グループに分かれてのおしゃべりは、自分らしい終活のために何が必要かを問い直すきっかけとなったようです。第2回では、シニアライフを具体的に考えた場合に、ぜひとも頼れるイクメン（地域活動に積極的な男性）、イクジイ（孫育てや地域の子育て支援に積極的に携わる祖父世代の男性）となって輝いてもらいたいと、笑っているパパのカリスマ、安藤哲也さんを講師にその極意を学びました。「こどもまつり」にも参加して、安藤さんの絵本ライブが披露され、目を輝かせて聞き入る子どもたちに多少のプレッシャーを感じながらも、何人かの参加者は、その後絵本の読み語りにも挑戦しました。そして、最終回の第3回では、ファッションをテ-

マに、カラーコーディネーターの若林真弓さんが自分に似合う服装や色の組み合わせについてお話されました。女性に比べると、ファッションに関心を持ったり話題にすることの少ない男性の皆さんの意識が少しずつでも変化し、ファッションセンスも磨いてもらえればと設定したテーマでしたが、意外にも(?)最初から関心が高い男性も多く、「衣」に関する参加者の皆さんの自立度と主体性がうかがえる回となりました。

川本町では、男性に限定しての講座の実施は初めてでしたが、昨年度の「お届け講座」に続いて参加された方もあり、「ブラッシュアップ」の名の通り、男女共同参画の意識にさらに磨きをかけ、今後の生活を輝かせていただきたいと思います。



第1回での語り合いの様子



安藤哲也さんの絵本ライブ



色の組み合わせを助言する若林真弓さん

## 【男女共同参画サポーター養成・支援事業】 「サポーターカ<sup>りよく</sup>アップ研修」(全3回)

日程：①8月2日(金)、②8月20日(火)、③9月20日(金) [主催：島根県、(公財)しまね女性センター]

島根県男女共同参画サポーター(以下サポーター)が、地域で男女共同参画推進に向けた啓発活動を行う上で必要な知識を習得するとともに、自身で課題を発見して「ありたい姿」を明確にし、周囲に伝えていく力を養うことを目的として、全3回の連続講座を実施しました。

第1回は「課題発見力を磨こう!」をテーマに、島根大学法文学部准教授の片岡佳美さんによる聞き書き文集制作ワークショップを実施しました。「私の子ども時代の女・男」について、語り手によって語られた内容を聞き手が文章化。聞き手は相手を受容・理解した上で発信する力、語り手は男女共同参画に向けての課題を意識しながら人生経験を伝える力を磨きました。出来上がった文集は、異世代がどのような性別役割規範・文化の中で育ってきたかを表す貴重な資料になりました。

第2回、第3回の講師は、NPO法人KiRALi代表理事の福井正樹さん。第2回では「自分の思いを明確にしよう」をテーマに、ワールドカフェを実施。ワールドカフェとは、カフェのようにリラックスした雰囲気の中、席替えをしながら会話を楽しむ“答え



第1回:ペアワークでスキルアップ



第2回:会話が弾むワールドカフェ



第3回:工夫を凝らしたプレゼン

を出さない会議”のこと。男女共同参画を自由に語り合いながら、この手法を習得し経験を積むための学びの場となりました。

第3回のテーマは「効果的な伝え方を学ぶ」。これまでの学びや自身の経験を元に、男女共同参画について地域で伝えていくコツを実践的に学びました。起承転結を意識して4枚の紙を使ったオリジナル資料を作成した後は、いよいよプレゼンテーション!最初は不安な表情を浮かべていたサポーターも、イラストやグラフ入りの個性豊かな資料を使って堂々と発表。最後には皆、自信と達成感に満ちたいきいきとした表情に変化していました。

3回連続での研修は初の試みでしたが、短期間で学びを反復しながら段階的に力をつけることができ、サポーター同士の交流も深まりました。さらなるサポーターカアップと、市町村を越えた連携を目指して引き続き支援していきます。



## 絵本作りのこと

雲南市在住のサポーターは、これまで市の男女共同参画センターのご協力を得ながら細々と活動を続けてきました。その体験を通して、これからの時代を生きる若い親と子どもへの啓発がとても大切なのではないかという思いが強くなり、そのためには何をすれば良いのだろうと考え始めました。今から3年ほど前のことです。

そして、思いついたのが、絵本作りです。私たちサポーターだけでなく、センターや雲南市男女共同参画まちづくりネットワーク会議のメンバーの方とも一緒に取り組んできました。

絵本作りの資金を得るために、しまね女性ファンドへの申請をした折、この2年計画の事業に「男女共同参画社会を推進するための種まき〜こども



先生を招いて勉強中のメンバー

に絵本で伝えよう自分らしく生きること〜」というタイトルを付けました。絵本の制作過程においては、高校生、大学生、子育て世代の現

状について、直接お会いしたり、アンケート調査をして聞き取り、あわせて意識啓発も行いました。絵本作家さんにお会いして、絵本とはどんなものかを勉強したり、アドバイスをいただいた時の皆の笑顔は格別でした。

そこから得たヒントを基に、1年目はストーリー作りに取り組み、結果としてタイプの違う2つの物語を作ることになりました。2年目になり、とりあえず、イラストの入った試作本はできたものの、言葉が多かったり足りなかったり、伝えたいことがばやけていたり展開が不自然だったり、問題は山積みでした。《どうすれば伝わるか》、《おもしろい!という絵本になるか》、当初から関わっていただいている大学の先生のご指導を仰いだり、時間をやりくりしては、ああでもないこうでもない悪戦苦闘の会を繰り返す日々。また、絵を描いてもらう雲南市内の2人の若者にも難題を強いました。彼女たちもまた、絵本作りは初めての体験なのです。

絵本作りの難しさを痛感しつつの2年。もう一歩というところまでこぎ着けた今、大勢の方々のお世話になって生まれるこの2冊の絵本を、何とかも活かしきらねば!という思いがこみ上げてきます。完成まで、あと少しです。

島根県男女共同参画サポーター(雲南市) 石田 美幸

## ●あすてらすネットワーク会員交流会を開催します!

日時:平成26年1月11日(土)

10:30~13:30

会場:あすてらす2階 多目的研修室

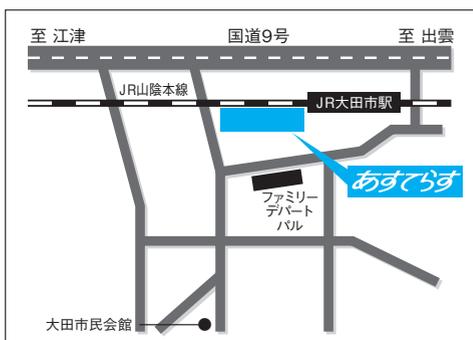
内容:ヨーガdeりらくす

ヨーガ療法士をお招きして会員のみなさんとヨーガを楽しみます。心と身体の声に耳をすまし、バランスを整えリフレッシュしましょう♪ランチ懇親会も予定しています。

会員募集中

一歩踏み出すためのきっかけ探し、情報収集、活動をPRする場など、様々な活用方法で交流の輪を広げていくネットワークです。郵送会員は年会費500円・メール会員は無料。会員特典もあります。

申込み方法など詳しくは、事業課(TEL0854-84-5514)までお問い合わせください。



島根県立男女共同参画センター

あすてらす

〒694-0064 大田市大田町大田イ236-4(JR大田市駅西隣)

TEL 0854-84-5500(代) FAX 0854-84-5589

ホームページアドレス <http://www.asuterasu-shimane.or.jp/>

利用のご案内 ((誰でも気軽に利用できます!))

●開館時間/9:00~19:00(貸出し施設については21:00まで)

●休館日/毎週月曜日・国民の祝日・年末年始(12月29日~1月3日)